

2022.10.26.

T.Kobayashi

歌は世に連れ 世は歌に連れ
日本唱歌集から見えたもの

書架の古い本を処分しようと思って手を入れ始めてもう十年近くなる。処分したのは僅かな量に過ぎず、あまり片付いたことにはなっていない。それは、片付けながら本を開いてしまうからである。

岩波の文庫本「日本の唱歌集」という本がある。堀内敬三・井上武士の共編の本で、奥付を見ると昭和35年に発行された第七版で、初版が世に出たのは昭和33年となっている。

中央線で国立から東京まで1時間の通勤をしている頃に、「読書」としてこの本を買った。

この本の素晴らしいところは、目次が二種類用意されていることである。ひとつは「歌の題名」でもうひとつは「歌の歌い出しの歌詞」で、多くの人の「歌い出しは憶えているけど題名がわからない」という悩みに対応していることである。

歌集を「読書として」読むと、詩であったり哲学であったり教育であったり、時代背景や政治や思想であったり、様々な面からの読み取りが出来て面白かった。

明治時代から昭和20年まで、時代で区切って約150曲の歌が歌詞と楽譜付きで記されている。

曲がわからないものはギターで確認してみたりして、あらたに憶えた曲もある。

明治時代の歌として最初に紹介されているのが「見わたせば」という歌で、ジャン・ジャック・ルソー作曲で二人の日本人がこれに詩をつけている。

作詞：柴田清熙（きよてる）のものは「見わたせばあおやなぎ 花桜こきまぜて みやこにはみちもせに 春の錦ぞ（以下省略）」という春の景色を美しく歌った歌。

今やこんな歌を聞いたことがないという人の方が多いと思うが、このジャン・ジャック・ルソーの曲に歌詞をつけた別の歌が、今でも生き残っている「おすんで ひらいて 手をうって おすんで……」。

二番目以降に出てくるのが「蛍の光」「蝶々」「霞か雲か」「才女」と海外の曲に歌詞をつけた歌が続く。明治10年代に小学唱歌として定められたものである。

明治20年頃になると、童歌などの国産の歌が登場するようになる。また歌詞の随所に「人は生きる上でどうあるべきか」を説くような歌も表われて来る。

「かぞえうた」では、「一つとや 人ター日（ひとひ）も忘るなよ はぐくみ育てし親の恩」と歌い

「紀元節」では、「空に輝く日のもとの よろずの国に類いなき 国の御柱建てし世を 仰ぐ今日こそ 楽しけれ」と歌う。

「紀元節」から数曲進むと「来たれや来たれ」という歌が登場して、少し空気が変わってくる。

「来たれや来たれ いざ来たれ 皇国（みくに）を守れや もろともに 寄せ来る敵は多くとも 恐るるなかれ恐るるな 死すとも退くことなかれ 皇国のためなり 君のため」

そして、少しずつ「戦に勝って、列強の国々にもひけをとらぬ国になろう」という国体の願望が表われてきているように見える。

この後に続く歌は、「故郷の空」「埴生の宿」など海外の曲に歌詞をつけた歌と日本生まれの歌が交錯して登場する。永井建子（けんし）作詞作曲の「元寇」は弘安4年の蒙古襲来（弘安の役）を歌ったもので、戦の流れを辿って歌い、正義の鎌倉男子が蒙古軍を海の藻屑にしてやったりと締めくくっている。少しずつ「国を守る心意気」を歌い上げた歌詞が目立つようになってきているが、「元寇」を作った永井建子は陸軍軍楽隊楽手でのちに陸軍戸山学校軍楽隊長になった人である。

そして次のページに登場するのが山田美妙斉作詞・小山作之助作曲の「敵は幾万」。

「敵は幾万ありとても すべて烏合の勢なるぞ 烏合の勢にあらずとも味方に正しき道理あり」

明治 24 年の国民唱歌集に載った歌であるが、この時期の歴史年表を見るとうなづくことができる。明治 6 年に徴兵令が施行され、習志野の原野に演習場が展開され始めたのがこの頃で、明治 27 年から 28 年にかけて日清戦争で勝利を収めて、台湾・澎湖島・遼東半島を手に入れた我が国の大陸への進攻が始まった時期になる。唱歌集に並ぶ歌も、「国威発揚」から「敵を打ち破る」に変化が始まっている。

「うさぎ うさぎ 何見て跳ねる」(うさぎ)や「年の初めのためしとて 終わりなき世のめでたさを」(1月1日)などの叙情歌や叙景歌もありはするものの、「勇敢なる水兵」や「婦人従軍歌」などが幅をきかせるようになってくる。

「煙も見えず雲もなく 風も起こらず波立たず 鏡の如き黄海は 曇りそめたり時の間に」と歌う「勇敢なる水兵」は佐佐木信綱作詞・奥好義(よしいさ)作曲、「婦人従軍歌」は加藤義清作詞・奥好義作曲である。奥好義は宮内庁雅楽局の奏者だったが、のちに洋楽を学びかなりの曲を手がけている。明治 20 年昭憲皇太后(明治天皇の皇后)が華族女学校に贈った歌「金剛石」も奥好義作曲である。「金剛石も磨かずば たまの光はそわざらん 人も学びて後にこそ まことの徳はあらわるれ」ダイヤモンドの原石が磨き抜かれて宝石として輝くことを喩えとした歌で、小学校の低学年の頃に歌った記憶がある。その頃には意味が理解できていなかったが、やがて大人になってから歌詞を読みかえしてみると、国語の時間に習った「古文」の復習になるような歌だった。

「夏は来ぬ」「キンタロウ」「モモタロウ」などの馴染みのある歌の間に挟まる歌は、南北朝時代の楠木正成にまつわる故事が歌われたもの。楠木正行・正時兄弟と高師直・佐々木道誉の戦いを歌った「四條畷」、足利尊氏・直義の軍と後醍醐天皇方の新田義貞・楠木正成の軍とが戦った湊川の戦いを歌った「青葉茂れる桜井の」などが続き、その間に武田信玄と上杉謙信の戦いを歌った「川中島」が挟まる。歴史・故事から拾い上げた美談などが知育・徳育の素材として活用された時代のようで、「歴史上の出来事を歌でおぼえた時代もあった」と生前両親に聞いたことがある。

やはり・・・、歴史の過ちの起点を感じながら読んでいくと、突然毛色の変った歌が出てくる。大和田建樹作詞・多梅稚(おおのうめわか)作曲の「鉄道唱歌」。この文章を書いている今、新橋から横浜までの鉄道が開通してから 150 年と言ってテレビ等で騒いでいる。東海道線が新橋から神戸まで全通したのは 1889 年(明治 21 年)のことで、東京駅が起点となったのは大正 3 年(1913 年)。鉄道唱歌は、新橋を出た汽車が神戸に着くまでの沿線の情景を細かに折り込んだ、66 番まである長い歌で、何度読みかえしてみても「読み物として」も興味深いがいまだに全曲の暗唱は出来ていない。神戸に宿をとり「明日は山陽道だ!」という歌詞で終わっているのも面白い。

「さるかに」「お月さま」「うらしまたろう」と続いた後に出てくるのが、武島羽衣作詞・滝廉太郎作曲で有名な「花」。「春のうららの隅田川 上り下りの船人が 櫂の滴も花と散る・・・」と美しい言葉が流れるように出てくる歌。

「箱根八里」「荒城の月」など叙景詩が続いた後、「はなさかじじい」「大江山」「鳩ぼっぼ」「すずめ」「お正月」などの幼児向けの唱歌が並ぶ。そして春夏秋冬の四つの季節で構成された「散歩唱歌」など心和む歌が続き、富国強兵から少しばかり離れてほっとする。

明治時代の歌が約 113 曲続いた後、大正時代の歌の始まりのページは「木の葉」「春の小川」と並び少しばかり安心していると、「村のかじや」「早春賦」などの間に交じって「広瀬中佐」「橘中佐」という日露戦争で戦死した勇者を称える歌が「文部省唱歌」として登場する。

「鯉のぼり(いらかの波と雲の波・・・)」「海(松原遠く消ゆるところ・・・)」「冬景色(さぎり消ゆる湊江の・・・)」「故郷を離るる歌(園の小百合 なでしこ 垣根の千種・・・)」と我々世代が愛唱

した歌が続いたあとに出てくる「児島高德（こじまたかのり）」はまるで馴染みのない歌だった。児島高德は、鎌倉時代から南北朝時代にかけて活躍した武将で、一貫して後醍醐天皇に仕えて南北朝時代には南朝側で天皇を支えた中心人物だった。鎌倉幕府末期に鎌倉幕府打倒を図る後醍醐天皇と幕府を擁護する北条氏（当時の当主は高時）との戦いで、敗れた後醍醐天皇は隠岐の島へ島流しになる。のちに楠木正成が挙兵して後醍醐天皇を救出する。そして北条家の政治は幕を下ろし建武の新政が敷かれることになる。備前国の豪族の出であった児島高德は、船坂山の戦い・杉坂の戦い等の厳しい戦いを経て後醍醐天皇救出・復歸に尽力した。

ここでも、南北朝時代の戦の勇者である楠木正成を中心とする武将の武勲や美談を称賛した文部省唱歌が登場する。天皇を中心に置いた「皇国」の国体の護持と発展が第一義であることへの拘りが楠木正成信奉となっているのだろうか。

そして、「朧月夜（菜の花畑に入日薄れ・・・）」「故郷（兎追いし かの山・・・）」
「浜辺の歌（あした浜辺をさまよえば・・・）」「とんび（飛べ飛べとんび・・・）」「風（誰が風を見ただしょう・・・）」と馴染みのある歌が続いて、大正時代が終る。

さてこの流れで進むと昭和時代の唱歌にはどんな歌が出てくるのだろうか、と期待半分諦め半分でページを開いて見たら、冒頭の歌は「屋根より高いこいのぼり・・・（こいのぼり）」で、「運転手は君だ・・・」と続きほっと安堵の気分になった。「咲いた咲いたチューリップの花が・・・」「螢の宿は河端柳・・・」
「ただ一面に立ちこめた牧場の朝の霧の海・・・」と馴染みのある文部省唱歌が続く。

予想に反して国威発揚歌や戦の英雄を称える歌は登場してこない。

「海は広いな大きいな・・・」「お馬の親子は仲よしこよし・・・」「梅の小枝で鶯が春が来たよと・・・」
「どんとなった花火だきれいだな・・・」「きれいな花よ菊の花・・・」「そろたてそろた早苗がそろた」
「遠い山から吹いて来る小さむい風に揺れながら・・・」

昭和 20 年までの唱歌は文部省唱歌一色になっていて、国民をある方角に向かって牽引するような意図のある歌は出て来なかった。おそらくこの時代には「流行歌」「歌謡曲」「軍歌」というカテゴリーが確立されていて、そちらの方にまとめられているのかもしれない。プロパガンダ的な歌は、童謡や唱歌とは別な意味でもう一段高い所から散布されていたのかもしれない。

また、この本を編集する段階（昭和 30 年代）になって整理されてこうなったのかもしれない。

明治時代の唱歌は 113 曲掲載されていたが、その中で「歴史上の故事になぞらえたり偉人を称えたりした歌」が 9 曲あり、「人の道を説く歌」が 4 曲、日清戦争・日露戦争を歌った「軍歌に近いもの」が 5 曲あった。「日の丸の旗」や「紀元節の歌」をどう分類するかは難しいので数える上では除外した。約二割近い唱歌は、何らかの形で国民に与える影響力を持つ歌だったとも読み取ることができる。

大正時代の唱歌は、19 曲、「歴史上の故事・偉人に関する歌」が 1 曲、「軍歌に近いもの」が 2 曲。

昭和時代（昭和 20 年まで）の唱歌は殆どが文部省唱歌で、文部省唱歌と表記がない歌もすべてが児童向けの唱歌になっていた。

第二次世界大戦の終戦後に編纂された書籍なので、様々な意図や思いがあってまとめられたものと思う。この一冊から読み取ったものをすべてと見ることはできないが、歴史の一側面を示しているものではあるかもしれない。

「歌は世に連れ 世は歌に連れ」と言われるように、歌はその時代の世情を反映したものが多く、また流行り歌が世の中の動きに影響を与えてしまったり、様々な需要と供給の関係にある。

何気なく耳に入ってくる音楽（歌）が、いつのまにか脳裡に残り思いがけないときに蘇ることがある。子ども頃に歌った歌、耳にした音楽などを突然思い出して、歌の意味も解らずに聞いていたことに気がついて我ながら驚くこともある。

以上